

浄

増上寺はこれ
浄土をあらわす

「寿」

大本山増上寺法主

大野 法道

日本が生んだ多くの宗教家の中で、一頭地を擡んでい
るのは法然上人である。上人のあらわれたのは、平安時代の終
り、源平の合戦の八釜しかった時代であった。当時のわが国
は貴族の仏教とでもいおうか、皇室を始めとして、公卿等の
間に仏教は広まっていたが、主として仏に供養をささげる
ことに利益があるとされていた。

これに対して、上人の心を動かしたのは、仏の心は世間の
万人に広く輝いているものであるということである。それを
拜むのは、仏の心をわが身に受けるにあると信じ、万人が仏
の名を称えることにある。つまり念仏するにあり、それによ
って仏の国である浄土へ生れることができるという信仰を打
立てられた。その浄土宗が開かれて八百年の歴史が流れ、今
日まで念仏が生きつづけている。

八百年の間には熱心な念仏の信仰者も数限りなくあらわれ
たが、とくに、わが徳川家康公は、熱心な念仏信者で戦陣に
あって、「厭離穢土、欣求浄土」を旗印とされ、日課念仏は
怠ることなく称えられた。家康公が天下を制定して、三百年
の基を開かれたのは、まさに念仏信仰の力であると思う。

浄土の信仰が、永遠に人類文化発展のあらゆる場面に大き
な力となって役立つことは間違いないと信じて止まない。



増上寺第83世
大野法道大僧正



大殿扁額
(大野法道大僧正謹毫)



完成なった増上寺大殿の偉容



大本堂内陣



三階修養道場内部



目

次

『寿』.....大 野 法 道

大本山増上寺大殿落慶記念

落慶を祝す.....	稲 岡 覚 順	(2)
あいさつ.....	光 山 明 道	(3)
祝 辞.....	根 津 嘉一郎	(4)
緑山大殿に御先覚を偲ぶ.....	林 靈 法	(5)

—増上寺新本堂落慶の意義—

開宗八百年に際して宗祖法然上人の御徳を讃う.....	鶴 岡 衛	10
法然上人は生きて御座る.....	磯 部 常 治	12
大本山増上寺復興工事の経過.....	佐 山 昭 順	13
増上寺随想.....	真 野 竜 海	15
増上寺の歩み.....	玉 山 成 元	18

いとし子をすくう念仏.....(21)

法然上人霊場めぐり⑩.....村 上 博、了.....24

—第17番二尊院・第18番月輪殿・第19番法然寺—

経典に聞くシリーズ⑨ 仏説無量寿経巻下<三>.....村 瀬 秀 雄.....30

念仏ひじり三国志⑦ 法然上人をめぐる人々.....寺 内 大 吉.....35

増上寺の宝物.....宇 高 良 哲.....46

—後陽成天皇自筆観智国師号勅許宸翰・経藏—



落慶を祝す

浄土宗宗務総長 稲岡覚順

縁山誌（浄土宗全書第十九卷）によれば、
「人皇一〇一代後小松院の御宇、至徳二年
酉嘗上人が浄家に宗を改め、年廿八歳にして
明徳四年十二月当山を興隆す」

とあり、また

「天正十八年八月御入国（徳川家康）の
時、当山をもって御菩提所と定め給いける。

十二世源誓存応上人（観智国師）なり」

と誌されている如く、増上寺はその由緒沿
源は遠く、伝々今に法灯輝き続ける首都東京
第一の名刹である。

従って七堂伽藍は古来「天下無双」といわ
れ、全国崇敬の的であったが、「火事は江戸

の華」の他聞にもれず、草創以来失火類焼の
厄を蒙ること十数回といわれ、壊滅、再建の
繰り返しであったとも言える。

特に明治以後についても、明治六年、同四
十二年、昭和二十年と前後三回の災厄を重ね
たのである。

殊に昭和二十年の災厄は、当時首都の大半
が蒙った壊滅的打撃の一部を分担したもので
あって、戦争という過誤に基く当然の帰結
で、いわば日本民族が共同に負うべき、共事
の所感として深く反省を要する所である。

戦後の増上寺は押しよせる激動の嵐の中に
その境域は縮少され、環境にも都市近代化の

波がせまりつつあるが、関係者の並々ならぬ努力によって、立地環境、境内の景観等の調和を考え、伝統を生かし、現代建築の粋を整え、新時代即応の殿堂として、美事その竣工を見たことは慶賀に堪えない。

時あたかも浄土宗開宗八百年の正当の年である。この聖辰を期してこの聖業が整い、落慶供養に併せて開宗八百年記念慶讃大法要が



あいさつ

大本山増上寺執事長 光山明道

厳修されることは、一宗として喜ばしい限りである。

事茲に至るまでの関係者の労苦に対し、深甚の敬意を表すると共に、これを契機として大本山増上寺がこの使命に鑑み、念仏弘通、社会教化に益々力を効され、世界の平和、人類福祉の前進に、一段の寄与あらんことを期待して心からなる祝意とする。

本年は、浄土宗開宗八百年の聖辰に当ります。稔りの秋を迎え、我が大本山増上寺大殿が竣工、茲に慶讃大法要を迎えましたことは、同慶の至りに耐えません。

思えば第二次大戦の末期昭和二十年五月廿

五日の大空襲により、当代日本を代表する木造大本堂、総和殿、景光殿、国宝南北御霊屋等が一片の灰燼と化してより、椎尾大僧正大野大僧正先代里見執事長等が大本堂重建に心身を捧げられました。又一宗寺院の激励と協

力、篤信護法各位の支援協力が美事に結実、今回芽出度慶讃の運びとなりましたことは感謝感激の至りでございます。

明年は浄土宗開宗八百一年、我が宗大発展

祝

ご本山の復興については総代の一人として長い間如何ゆう風になるのか案じては居りましたが、この度立派に秋空高く鷗尾金色鮮やかに大殿が完成し、増上寺会館も内部の改修で面目を一新したほか、粧いも新らしく生れ変わり、いよいよ来る十一月十日に落慶大法要が行なわれることは檀信徒一同の大きな喜びであります。緑したたる芝公園内の本山にふさわしく境内も整備緑化され、都民の心の憩いの場所として多くの人々の足を引くこと

への第一歩の銘記すべき佳辰となります。増上寺大殿を基礎として、諸人の安心立命福祉請来のため、御活用あらんことを念願して御挨拶と致します。

辞

大本山増上寺総代 根津嘉一郎

となるでしょう。

本年は宗祖法然上人さまが浄土宗をお開きになつて八百年ということですが、どうか大殿の落慶を機に、新しい施設をフルに活用して心の砂漠時代と云われる現代の人々に法然上人のみ教えを伝えて欲しいと存じます。

人生相談、信仰相談、文化教室等を開設してみ仏のこころを洽ねく及ぼして下さるよう
にお願いして落慶の祝辞といたします。



縁山大殿に御先覚を偲ぶ

— 増上寺新本堂落慶の意義 —

林 雲 法

(大本山百万遍知恩寺法主)

縁山大殿の落慶ということで、先づ心に浮ぶのは、堀尾貫務大僧正のお姿である。

大正十二年の大震災のため、あの壮大な木造の大殿がいく万のいたましい精霊と共に烏有に帰してしまった。やがて、大殿再建のために、貫務大僧正は勧募のために車に乗って、全国の行脚に出場せられた。名古屋では、そのご老体を錫杖に寄せられながら、車の上から合掌され人々から寄進を受けられていた。当時高校に入ったばかりの私は、町の遠くから眺めて、何か自分の胸にうつものを受けていた。

貫務大僧正は私の名古屋の養林寺の御一代として晋董せら

れた関係で、名古屋にお出のときは、いつも朝早く養林寺御本尊にご参詣になった。私の師範であった父親は、いつも大僧正をご案内申しあげていた。ご参詣のあと、書院でしばらくお話しがつづくのだが、とき折私も呼ばれて大僧正の前にこわごわ座らされた。私の父親は貫務大僧正が百万遍御在住のとき幹事として御奉仕いたしたので、大布教家としての大僧正について、いろいろのことを聞いている。

あるとき父親の所持のものから、古いもので大福帳のようなものが出てきた。筆で丹念に毎日の記録が示されていたが、それが「養生食い」となって、この日は何本、この日は何本と詳しく記入されてある。父親にきいて見ると、当時百万遍の西門の横に焼鳥屋が出ていた。父親はからだが弱く

て、医師から十八までしか生きれぬと言われた。貫務大僧正は「法純、お前はからだが弱いから養生を怠ってはいかん。養生食い、ということで焼鳥でもたべて、からだをつくることだな」と仰せられたということである。生涯にわたってあの肉や魚のきらいだった父親が、壮年のころ養生食いとして、かくも毎日丹念に書き込んでいった筆の文字をよみつづけて意外に思った。

二

私は大学を出て二年後に、貫務大僧正の御努力によって、以前にも増して立派に出来あがった壮大な大殿で加行を受けることができた。

当時は宗門大学外の大学を出たものは、教師の資格を得るためには、それから二年間、しかるべき指導教官について勉強し、それから始めて律師の検定試験を受けることになっていった。私は指導教官として浄土宗執綱渡辺海旭先生に、仏教クラブでお目にかかってお願いにあがった。

改良服がたの先生は、立ったままジツとしばらく私を見つめていられた。あのときの大きなお目が、いまでも忘れられない。すると先生はわしはこの通りとてもいそがしい。大島泰信にたのんでやろうと仰せられて、それから中目黒の大島

先生に二年間指導教官としてお願いをいただいた。

そんなことで二年後に律師検定試験を大正大学で受けることとなって、日曜日朝早く出むくと、受ける者は私一人だった。学長室で朝から夕方まで、十三の課目について答案をせよと書きつづけた。これで律師の資格を受けて、その年の暮れに増上寺で加行を受けることとなった。

朝早く、五十名の加行僧が一行になって、私どもの控えから境内に出て、石下敷きつめられた参道を大殿に向かって登っていく。壮大な大殿の大屋根が蒼高に向かって屹（え）ている。朝の霧が樹々の根もとに連々と流れている。あのときの身のしまる思いは、まことに尊いものであった。朝の勤行の声と鐘の音との交錯した厳肅さは、無道心な私にも何か求道への焰をかき立てていたのである。

私たちは道重大僧正より法を受けたのだが、この加行中三夜にわたって、大殿で椎尾弁匡先生から法然上人の信仰について法話をいただいた。

夜の大殿で改良服のすがたの先生は熱意をこめて、法然上人の念仏についてお話しになり、私ども若い僧侶に信仰の何物たるかを叩きつけられた。一時間余のお話しの後に、加行僧の先唱で夜の勤行となるが、六時礼讃の内陣行道にあたっては、椎尾先生も私どもの行道にお加わりになったが、あの

お姿がいまも生き生きと残っている。

幽暗なともしびの明滅する大殿の内陣にあって、五十余人の修行僧が真剣に光を求めて行道をつづけていく。その間にあって、ひとりに菩薩大師が、私どもの中にまじわられて、これも光をお求めになっているお姿であった。そのとき、ふと私は大原問答の場面を思い出していた。南都北嶺の学匠を相手に念仏の法門の尊さを説きあかし、遂にこれに心服した顕真を始め、一座の学匠たちは、感動のあまり三日三晩念仏行道して、その声は大原の山谷にひびきわたったとあったが、ふとそんなことを思っけて行道をつづけていたことを忘れることができない。

そして、この大殿で私は渡辺海旭先生の御葬儀に接した。昭和八年二月一日である。

会葬者は大殿を埋めつくして、なお境内を埋めた。漸くの思いで堂内のかたすみに入ることを得た私は、合唱隊が哀歌を捧げるころから、涙が流れてどうにもならなかった。当時一介の書生子であった私は、偉大な宗教者のご人格に打たれながら、最後までうつぶして泣いていた。「もった、先生からお教えを受けておかねばならなかったのだ」心にくやまれでならなかった。

三

やがて、東都の表玄関にあって、人々の魂を守りつづけて来た縁山の壮大な大殿は、悪夢のように戦禍を受けて焼失した。

縁山の再建よりも、荒涼たる廃墟にすさみゆく日本人の心の建てなおしをと、椎尾大僧正は廃墟の日本中を東奔西走して、先ず日本人の人間殿堂の再建にご努力をいただいた。九十五歳のご高齢にいたるまで、目の見えぬご不自由なご老体を運ばれて、常に東奔西走のお姿をうかがっているだけで、そこに私ども末輩は無言の大きなご説法を受けていた。私どもが少しばかりのいそがしさに堪えかねて悲鳴をあげかけると、いつもすぐに二人三人の方に手を支えられて、教化に出られます大僧正の尊いしろ姿が目に見えてくるのである。

「法のためである。たとえびょうまんたる滄海が隔てようとも、生命を惜むべきでない。お前たちが行かないならば、私が行くことにする。」

音調は低かったが、しっかりと答えた鑑真であった。

これは大明寺の一室で日本の留学僧らの伝戒の師を求めたのに対し、三十余人の弟子らが日本に行くことを答えなかったのに対して、師僧の鑑真の言葉であった。このとき、鑑真

の骨格はいかにもがっちりした柄の人で、額はひろく、眼も鼻も口も大きく、確りと坐っており、頂骨は秀いで、顎は意志的に張っていた。高名、高德のこの僧は、日本の武將にも似ていると伝えられている。このような鑑真の風格に思い合せて、同時に、「育いた目を静かにつぶって、枯れ切ったような姿である。この鑑真の像を眺める度に、私は内心に秘められた烈々たる気魄を感じるような気がして、深い感銘を受けるのである」と、今よう鑑真として椎尾大僧正に深い尊敬を寄せられた岸本英夫先生のお言葉を思うのである。

漸く緑山大殿再建の準備成り、起工式を前にして大僧正の御遷化、大野現御法主これを受けつがれて、ここに再建の宿願を全うせらるることとなった。

まことに御同慶のいたり、この上もなきことである。

四

数年前、小雨そぼふる月曜日の朝七時ごろ、私はバリのセーヌの流れを右に見ながら、河沿いにノートル・ダム寺院に向かった。セーヌの川面には細い糸のような雨が落ちて、川の流れはしずかに動いていた。

ノートル・ダム寺院前の広場は大きな石畳で敷きつめられていた。正面に巨然としてそそり立つカテドラル全体が、灰

色の空の中になかば黒ずんで見え、八百年の歳月がしみこんだ伽藍全体の石の壁が、灰色の空につやけしした銀色のように、やわらかく大きな輪廓を浮きぼりにしていた。雨にぬれながら、大きく高くそそり立つこの寺院は、たしかに「バリの守り神」たる風格をそなえていた。

ノートル・ダム寺院（聖母マリアの名）は十二世紀以来、数百年の塵を洗い落して、バリ発祥の地であるシテ島に輝いていた。この寺院の奥行は一三〇米、正面の幅は四八米、天井の高さは三五米であって、内部には九千人以上の人が入れる。

私は中央の「最後の審判門」の入口から寺院の外陣に入った。うす暗い中に入ると、すぐ入口のところに黒い法衣をまとった僧侶から一枚の印刷物をわたされた。聖書の言葉である。広大な外陣には人かげは見えない。あたりはまことにうす暗い。人かげのないのを不思議に思いながら、私はひとりで広大な外陣の右側の回廊に出て、しずかに、さぐるような気持で奥にすすんだ。暗い回廊の右側の壁には、ところどころとても長いローソクの者が暗の中にいく本も輝いているのである。私はその明りをたよりにして、足もとに気をつけないがら近よって見たのである。とたん、私の足はそこに立ちどまってしまった。

そこには、ひとりの女性が跪いて、両手をにぎりしめて、それを祈りの台の上において、うつぶしたまま祈りつづけているのである。彼女の前には、高いところに聖像がうつすらとほのあかく照し出されていた。じっと見つめている私の目には、それは十代か二十代の若い娘であることがわかった。そっとしりぞいて、足を廊下の奥の方にしのばせていくと、右手の壁にはいく箇所にも長いローソクが同じように光っていて、その下の祈り台には、二人或いは三人の若い女性が、同じように跪いて祈りつづけている。

私はそのうす暗い中に、この静けさの中に、ここに一人、ここに三人、ここに二人と、回廊を奥に進むにつれて、南側にいくつも並ぶ幽暗な礼拝堂に、このしずけさの中で、真剣に折りつづけているいく人もの敬虔な姿を見て行ったのである。私は深い感動を受けていた。

パリはもともと芸術とファッションの都である。モンマルトルの丘やシャンゼリゼーの街を歩けばそのことがわかる。それだけにそこは、みなぎる淫蕩と頹廢の街だと言われているし、私もそう思っていたのである。信仰などとは、およそ縁遠い街だときめていた。パリの華かさのかげには、デカダンスの傾斜する淋しさがあると思っていた。

ところが、私はこの淋しさを打ち砕かれて、よろこびを与

えられていた。それはノートル・ダムに祈る敬虔な人々の姿であった。そのとき、ふと私はこんなことを思っていた。

昨夜のバリは果して平安であったか。罪の街バリ、愛憎無限の巷バリ、汝の眼りは果して安らかであったのか、と。

されど、今朝のバリは朝から雨によって清く洗われている。この聖堂での祈りによって、巷の罪と塵埃とは清められていくのだ。ノートル・ダムに跪く一人の人間の中に、やがて何万何億の人間の魂が救われていくのである。

さすがにフランスのカトリックは「教会の長女」と言われるだけあって、長い伝統の上しっかりと起っている。ノートル・ダムの寺院は生きている。今日もパリの街の悲哀と希望のまなざしをもって、じっと見守っている。たしかにバリには今日もお、美しい宗教の力が厳然として生きている。

増上寺の新大願成るノ 浄土一宗のよろこびから、更にこれを首都のよろこびたらしめたい。私が数年前にノートル・ダム寺院に受けた深い感動「パリの守り神」としての祈りの道場、これをこれからの三縁山増上寺本堂より流れる威神力に期待したい。

このままではいまの文明がほろびる、世界が沈下していく。日本の表玄関、世界の太平洋に向って、巨然とそそり立つ三縁山に、仏光照益、仏日倍增の将来を至禱してやまない。



開宗八百年に際して

宗祖法然上人の御徳を讃う

鶴岡衛

(大本山増上寺奉讃会監事
財団法人清寛宮奉讃会監事)

浄土宗開宗八百年に際し、増上寺大殿が大野法主台下はじめ宗門の僧衆・檀信徒並びに有縁無縁の合力協賛によって建立せられ、昭和四十九年十一月十日落慶法要が営まれることは、大いなる感激であり各位とともにここに慶讃いたす次第です。念珠をつまぐり、口称念仏し、宗祖法然上人の慈愛に富む御影に接する時、心からあたたかい想いが感得され、「弥陀の化身」、「善導の再誕」と広く仰がれたことも宣なるかなと、今更ながらに親しく思われます。

およそ、阿弥陀仏そのものの信仰はその淵深きわめて古く、インドの馬鳴・竜樹・世親等の諸菩薩・中国の曇鸞・善導等の諸大師によって、それぞれの教学的立場より説かれ、やがて日本浄土教として発展したものである。そして、日本浄土教において先蹤をなしたのは、空也上人・恵信僧都など

であり、恵信僧都源信は『往生要集』で「往生之業念仏為本」を強調し、その地獄の描写は絵画・説教などを通じて、日本民衆の道徳観・人生観に永く深い影響を及ぼして来たのである。

しかしながら、浄土教をしてその真実の本質を発揮せしめたのは、実にわが宗祖法然上人であつたわけである。

法然上人の幼名は勢至丸。長承二年（一一三三）、美作国稲岡庄（現在の岡山県久米郡久米南町）の名族漆間家に生まれ、わずかに九歳の春、父時国公の急死に遭遇し、その遺誠によって出家したのである。やがて十五歳の時、叡山に登って受戒し、十八歳で西塔黒谷の叡空師の室に入り、法然房源空と称した。そして学問修業に精勵し、「智恵第一の法然房」と誉れも高かったが、求道の志かたく、「戒・定・慧の三学

のほかにわが心に相応する法門ありや、この身に堪能なる修行ありや」とついに出離の道に転じたのである。かくして経藏にひとり籠り、一切経を閱讀すること五度に及び、「一心に専ら弥陀の名号を念じて、行住坐臥に時節の久近を問わず、念々に捨てざるものこれを正定の業と名づくかの仏の願に順ずるが故に」との唐の善導大師の『観経疏』の一句を見出して、大いに歡喜踊躍されたという。

利智精進の人はともかくとして、凡人が自己を内省した時、誰が自己の戒行によって正覚を得ると信ずることができようか。絶対他力の教済の本願にあっては、持戒・供養・献塔その他の功德善行は福德利益でないとはいえないが、浄土を約束するものとしては十念一唱の念仏、換言すれば帰依、信願の念仏にもとずいてはじめて救済にあずかれるものなのである。このように、あまりに単純な教であるために、かえって信じがたく、そこに親鸞上人が弥陀の本願を以て難思の弘誓なりという所以があるわけである。信じがたい弥陀の本願こそまた安樂易行の船旅であったのである。

法然上人はこうして不動の宗教的確信を得て、修学の地黒谷を去って、吉水に草庵を結び、念仏三昧に入ったのである。時に承安五年（一一七五）、上人四十三歳の折であった。そして法然上人の主觀的回心のこの年をもって浄土宗の開宗

とするのが、今日の私達門流の立場である。

當時の世相は保元・平治の乱により、骨肉相食め、教界もまた修羅の巷と化し、九条兼実はその日記『玉葉』において「火災、盜賊、大衆兵乱、上下騒動、縋素奔走誠にこれ乱世の至なり」と嘆いている。世はまさしく五濁惡世であり、旧仏教団は呻吟する民衆に対して背を向けていたのである。「念仏の声するところが遺跡である」と遺言した法然上人に教団を形成する意思がなくても、厭離穢土、欣求浄土の信仰を求めて信者は洛東吉水の地に蜩集し、専修念仏の集団がおのずと成長するに至ったのである。

ひるがえって今の世を觀するに、わが国は未曾有の敗戦によって国土は荒廃に帰したが、国民の真摯の努力によって新憲法の下復興し、經濟の發展は著しく刮目に値するほどのものがあつた。しかし反面、領土は狭少となり資源は乏しく外国のそれに依存せざるを得ないため、しかも經濟の底は浅くやもすれば安定を欠き、かつ公害が瀰漫し、國民の道義は低下し、あたかも仏者のいう「末世の感なきにしもあらず」という時勢である。この秋にあたり、國民道義を振策し、その裏付けとしての正しき宗教情操の涵養が望まれるところである。

もとより仏教は、鎌倉時代に天才的宗教家が輩出し、百花

療乱の趣きを呈したわけであるが、漸次低調化し今や宗教本来の面目に欠けるところ甚だなるものであらう。この期に臨



法然上人は生きて御座る

磯部常治

(共生会理事長
弁護士)

月影のいたらぬ里はなけれども

ながむる人の心にぞすむ

今、念仏門浄土宗開宗八百年記念祭を、そして浄土宗大本山増上寺落慶記念の大祭を迎えるに当り、真剣にかたく御念珠を握りしめ合掌して、「南無阿弥陀仏」の御名号を十念して極楽往生の浄土を念願したいと思う。

ところで思うに、今のこの日本はいったいどこへ行くのだろうか。また歩む道はこれでよいのだろうか。歩く姿はこれでよいのだろうか。このように考える時、現実の世相は、「むつ」は太平洋上に右往左往と漂流し、陸上には、食糧

んで、宗祖の行跡を顧み、宗義を昂揚することは、僧俗一体としての要務であらう。

に、交通に、また公害は充満し、さらに隣国外交に、国内教育に、裁判にまで決して安身立命とはいえない多くの公私害で困惑しているという状態である。全く人生は、四苦八苦共に凡夫で虚仮の世でとはいえ、この現実の穢土をいかに観察し、かつ受け取って行かなければならないか。こうしたことは日本民族の重要な課題であると思う。そこで、私は祖先伝来の浄土念仏を宗旨とする信者として、念仏の研究信行の結果、法然上人様のような偉い人はないと信奉して来たのである。

人間は幼少より青年となり、ついに老年を経て死に至る。この道程である人生生活を迎え過せば、日々の生業に身をも

って上人の念仏の尊さと、ありがたさを感じるのである。それはこの念仏すなわちその生きた、しかも生かす念仏であることを知り悟って、日常生活にこれを受け取り実行するときは、理益はたちどころに顯われるのである。この要諦は、人生娑婆世界がすべて相対性で、諸行は無常であり、一大乗船、無名自然、天地の中の人として大乗念仏のなかの人生であることに、自己自身が気付くことがもつとも大切であるからである。そこで、これを自覚するのは自身の心の持ち方にあるというわけで、法然上人は「月影の歌」をもつて「なが

むる人の心にぞすむ」とやさしく説法されている。しかも、このことは八百年前に詠歌をもつてお諭しになられた法然上人のご聡明さは、上人のご事跡を知れば知る程頭が下がるのである。この公害の満ちた世の中を一日も早く浄土の教化において化導実践したいものである。このように深く念願するとき、法然上人の念仏求道の誓願は、青少年のさらに一層の奮起を祈願するものであらう。そこに法然上人の念仏は今も生きてゐるものと思われ、その恩徳にまごころをもつて報いたいと思う。

大本山増上寺復興工事の経過

佐山 昭 順

(大本山増上寺復興局主事)

昭和四十六年四月十六日、増上寺恒例の行事である御忌大会の最終日に豪放にして華麗なる横綱大鵬の手数入りを組み入れた起工式を挙行して以来、三年有半の月日を経て、いよいよ宗門あげての悲願である大本堂建立が成り、来る十一月十日にはその落慶の式典を挙げることになった。

惟うに三年半の月日はながく、この工事期間中必らずしも平穩無事の進行ではなかった。

即ちこの間発願主椎尾御法主台下並びに里見執事長の御遷化があった。更には昭和四十八年に入り社会経済のバニツク、諸物価の暴騰、そして建築資材の不足等とまさに前途多

難の感があつた。然しながら工事関係者一同は益々この聖堂達成の心意氣がたく、これ等の困難を克服した。最も恐れていた資材の不足は日新設計株式会社を中心に請負者清水建設、大林組、日立製作所、東京電気工業の各業社が各々その持てる力を最大限に生かし、他の建築現場では一時期開店休業を耳にする時増上寺現場は休むことなくクレーンが動き、鉄材、コンクリートの補給が行なわれ工事の連行が続いたことは関係者一同の感激であつた。

このようにして、ようやく大本堂の工事は完了し、現在はい三解脱門から大本堂に至る広大な境内の整備と旧増上寺会館の改修工事を行いつつ、目前に迫る落慶式の日に向つて進展中である。

終りに宗門内外を問わざる多くの方々の物心両面にわたる心温まる御支援の賜であり改めて深く感謝の意を表する次第である。

次に工事の経過及び概要を記し報告書とする。

記

- 一、昭和四十六年四月十六日 起工式
- 二、昭和四十七年三月十四日 立柱式
- 三、昭和四十七年八月三日 上棟式
- 四、昭和四十九年六月二十三日 入仏式

五、昭和四十九年十一月十日 落慶式

大本堂の概要

- 一、構造 鉄骨鉄筋併用コンクリート造り
- 一、総坪数 一〇、八三三平方米（地上三階地下二階）
- 一、間口 四八米
- 一、奥行 五二米
- 棟高 三五米
- 一、工期 昭和四十六年四月より四十九年十一月
- 一、三階 修養道場
- 二階 大本堂（収容人員一、〇〇〇名）
- 一階 事務所、信徒控室
- 地下一階 大ホール（収容人員三〇〇名）
- 文化部門
- 地下二階 増上寺靈廟（一、六〇〇基）
- 設計 大岡実工学博士、日新設計株式会社
- 施工 清水建設株式会社、株式会社大林組（共同企業体）
- 設備 株式会社日立製作所、東京電気工業株式会社

以上



増上寺随想

真野 竜海

(大正大学教授
東京芝天光院住職)

院であるから宝といえ、これ一つということである。

元和四年(一六一八年)、国師が、天光院二世春貞上人に、自ら賛を書いて授けられて以来三五七年间、数々の火災等の中を守り続けて護持されたものである。増上寺の歴史の書である『縁山志』を見ると、類焼の項があつて、天正十年(一五八二年)、今の皇居辺の貝塚にあつた当時に焼失してから、方丈数回、山内十回以上の火災を述べている。今次大戦中も、前住の依頼で保管を引き受けて下さった鎌倉大仏殿佐藤密雄博士の手許に難を避けた。現に、焼夷弾が一発落下し、全寺族の力で幸い消しとめられたが、もし、あの庭に多く落

私は縁あつて山内塔頭天光院に入つて二十五年になろうとしている。入つたとたん前任真野正順師より、天光院に火事等一大事のあつた時は、これを持ち出せといわれて示されたのが、観智国師画像を納めた箱で、他に国師の書状一通軸装したのもも収まっている。あの実質的には増上寺の基礎を開かれ、同時に浄土宗発展の組織作りをされた国師の真影で、しかも、増上寺歴代の住職が晋山されるときは、これを拝される仏衣式が行われるという尊いものである。先には浄土宗の宗宝に指定されてあつた。私は感激した。もっとも、御本尊様と過去帳を除いては、他にどう見ても値打のもののない小

ちた中からもう一発屋舎に命中しておれば絶望であつたであらう。

x x x

『縁山志』の伝えるところによると、小院は、国師の師、増上寺第十一世円也上人を開山とするので、その当時は勢力があつて、檀家も多かったけれど、だんだんと後の住職に替つていく中、山外寺院と異つて檀家に諂らわなかつたのであらうか、三軒きりになつたと記されている。勘ぐれば、住職が頭が高かつたか、権勢風を吹かしたのではないかと思う。それは、国師像をお守りすることに力が入りすぎたのであらう。いずれにせよ、その護持は絶対命令である。

x x x

小院開山円也上人は、伊勢の寺も住せられたことがある。私もそうであるが、その私の育つた津の天然寺の筆頭総代で代々江戸に木綿問屋田端屋を続けてこられた田中治郎左衛門（世襲名）家が、先祖より増上寺で木綿供養をされていることは、当事者、つまり供養に与つた方々以外には知られていない。これは、春秋二回、増上寺で僧侶の資格を与えられる加行道場が開かれるのに対し、同家から一反つつの木綿供養の布施が一人一人の加行僧になされ、加行僧は同家の回向をするのである。今回大戦中の物資不足で施物は變つて手拭等

なり、施主も近代的に株式会社田端屋商店になつたが、木綿供養そのものは、絶えることなく続いている。浄土宗の僧になる者は、西は知恩院、東は増上寺のどちらで受けてもよいので、どうしても増上寺は中部以東の人が多いから、この行事は、全国的には知られていないが、尊いねばりづよい布施行であり、篤信である。

x x x

増上寺の特色は、広大な寺域の中に、全国からの学徒三千と号する僧たちの宿泊はもちろん、講義、圖書の設備、宋・元・高麗の各本三部の大蔵をもつ天下に冠たる経蔵等の設備を整えていたことである。私の師匠が、そのようなことに連関して語っていました。外国の大学でも、教会を中心に発達していったのだ。増上寺あたりで、昔のような寺域がキャンパスになるような大学ができないものかと。たしかに、明治維新後は山内何ヶ所に各大学の初めの段階のものが作られました。拙寺でも、慈恵大学の方が、こちらに昔あつたが、寺の記録はないか、と尋ねてこられたり、となりの留園のあたりは札幌の農業大学の前身があつたらしい。拙寺内にも、明治二十年に浄土宗学本校が設置され、二十四年に小石川表町に移っている。これが三十一年に専門学院と高等学院とに分かれ、前者は京都に移つて仏教専門学校、現仏教大学とな

り、後者は、東京の現大正大学となった。私事ながら小生は、前者を経て後者を卒業し、その発祥の寺に住する廻り合せとなったのである。

× × ×

現在増上寺には三康文化研究所が設立されているが、裏側にあるのと地味な活動で、気がつかない人もあるが、一流の所員を中心に、宗学、仏教学、哲学、宗教学、東洋学の重要な研究と業績が積みあがっている。伝統というものは恐いものである。教学の眼であり、芽である。私も、その一つの会合に参加させて頂いているが、宗学、仏教学を中心に、きわめて自由なディスカッションを交えて、真剣、しかも、楽しい会である。オフレコであるべき話だが、ほとんど録音されているのも面白い。何十年か後まで保持されるとすれば、いろんな意味で貴重であろう。

× × ×

近頃、増上寺の声明しやうみょう、つまり仏教声楽も、国立劇場等で公演されることが多くなった。ある時、拝聴して感じたことであるが、それは、太鼓、鐘などの入っていたせいか、ものすごくダイナミックであり、妥当でない表現かもしれないが勇壮活発、風威辺りを払うがごとくであった。また、ある時の声明は、剣道の間合いのごとく、中絶の時を置いては、切

りこんでいく鋭さとか、澄徹、莊嚴そのものである。素人でよくわからないが、声明は法要に用いられ、將軍、また、武家の参拝の機も多く、とくに、江戸城中よりの時は、その失敗は許されないものであろうから、自ら、真剣でしかも武士的、関東の性格を帯びてきたのではないだろうか。最近では、声明はもとより、雅楽をされる人々が増上寺を中心に随分増え、練習も盛んとなり、当然ながら、すばらしい水準を示している。これも、遠く洛北大原魚山の流とはいえ、江戸三百年に洗練されての伝統というべきであろう。声明は、五線譜では完全に伝えられない、人から人への口伝である。今、その人を得つつあるようで喜ばしい。

× × ×

増上寺と徳川家、とくに徳川家康との関係を知らない人は少いが、徳川家康が、生涯を念仏信仰、しかも、法然上人のいわれるように口に念仏、時には日課六万遍を目標に称え、また、六字名号を無数に筆写した事は、知る人が少い。家康の信仰はたんなる政略だけでは天下は治められないという証拠を残したともいうべきではなからうか。このことは、もっと多くの人にわかってもらいたいと思う。

大殿を中心に各方面にわたって、復興を遂げつつある増上寺ではあるが、やはりその中心は、この念仏信仰である。

増上寺の歩み



玉山成光

(大正大学教授)

かなすぎ橋をうちわたり、ゆんでを見れば増上寺、ごくのおもてを眺むれば、三縁山とうたれたり、さて本堂のみつけには、けまんのはたの限りなく、たまのやうらくつらなりて、光りかがやく仏前に、はちすの花の咲きみだれ、あひをしのびてほのぼのと、香のけぶりのたちのぼる、そのゆくすいをながむれば、五色の雲にうつろいて、みだのらいいりますは、けうも極楽かと、目をおどろかすばかりなり、

(東めぐり)

寛永二十年(一六四三)ごろの増上寺は、この世に極楽を再現したような、すばらしい伽藍が建ち並び、天下第一の寺院といわれる大規模なものであった。幕藩体制の基礎が確立し、徳川將軍家の菩提所であれば当然である。

増上寺は南北期末の明徳四年(一三九三)聖聡上人によって開かれた。もとは光明寺という真言宗の寺で、江戸豊島郡貝塚(現平河町付近)にあったが、聖聡上人が入寺して浄土宗に改宗し、増上寺と改称すると同時に、千葉氏や佐竹氏の寄進によって堂宇を再建し、江戸における念仏布教の中心地となった。聖聡上人は東国の武將千葉氏胤の子供で、早く氏の寺の千葉寺に入って密教の修業をしていた。ところが下総布教中の名僧聖岡上人の高徳にひかれ、永徳三年(一三八三)ごろには弟子となって浄土の学問をするようになり、『釈浄土二藏頌義』を伝授されるまでに成長していた。その後十年間聖岡上人について修行した聖聡上人は、奥義を授けられるとすぐ江戸に上った。おそらく千葉寺の関係から貝塚の光明寺に入ったのであろう。そしてこの光明寺を復興改宗して著述に布教に大活躍を続けた。聖聡上人の後をついで二世とな

つた酉仰上人も千葉氏の一族であり、この他にも多く僧侶を輩出した千葉氏が檀越となつて増上寺の基礎は確立していった。もともと千葉一族は三祖良忠上人のときから浄土教とは関係が深かったが、この時代になると、鎌倉時代より一層浄土教が浸透し、来世の極楽往生を願うものが多くなつた。まして戦乱の世であれば更に拍車をかけたことはいふまでもない。文明三年（一四七一）戦乱によつて焼失したが、まもなく復興し、九世貞把上人、十世存貞上人のころは、伝法道場として注目され、諸国から学問の修行に集まるものが多くなつた。それ以来今日まで伝宗伝戒の道場として続いている。

二

本格的な増上寺の復興は、徳川家康と普光観智国師存応上人の出現をまたなければならなかつた。つまり天正十八年（一五九〇）小田原の戦争が終り、関東八か国を豊臣秀吉からもらひ、徳川家康が江戸に入城すると師檀の關係ができ、徳川家の菩提所となつて急速に発展した。家康との結びつきについては従来『開運録』などに記されている説をとつていた。つまり家康が江戸城に入るといふので、この様子を見ようとして老若男女は群集した。このごろ増上寺は竜の口にあり、住持の存応も門前に出てこの様子を見ていた。馬上の家康が門前にさしかかると、どうしたことか馬が止つて進まない。

左右を見ると門前に一僧侶が立っている。家康はあそこに立っているのは何という僧侶かと近習きんしゆに尋ねさせた。近習が尋ねると、寺は浄土宗、名は存応だと答えた。馬上で聞いている家康は近習の報告しないうちに、それでは存貞の弟子の存応かといひ、馬から下りて増上寺に立ち寄つた。存応は大いに喜んで茶の接待をしたが、その時家康は、明朝自分一人で参詣し齋をともにしたいといつた。存応上人はまさかと自分の耳を疑つたが、万が一来るかもしれないと思つて用意をしておくと、家康は約束通りやつてきた。存応上人は喜んで^{きん}施菜の齋を出した。そのとき家康がいうことに、自分が今朝齋をねだつたのには理由がある。大将の身分で菩提所のないのは死を忘れるのと同じである。先祖代々の菩提所は三河の大樹寺であるが、江戸にはないので増上寺を菩提所としたいと頼みこんだ。すると存応はただ涙を流すだけで返事がなかつた。どうしたのかと家康が尋ねると、昨日入府したばかりなのに、このような沙汰があるとは思ひもよらなかつた。その上、私のような愚僧が菩提所の住持になるといふことは、何とありがたいことであらうといつて涙がとまらなかつた、という。家康も感悦し、それでは師檀の契約に十念を授けてくれといひ、家康は存応上人から十念を授かつて帰城した。その後家康は増上寺を平河口に移したが、城の要地が狭

くなつたため、慶長三年（一五九八）今の芝に移したといふ。これは家康の浄土信仰と存心上人をもち立てる話としては面白いが、理由がわからないために作られた雑説で、とるにたらない。家康の菩提所は三河の大樹寺で代々浄土宗である。しかし江戸に入ると三河は遠いので地元で菩提所をつくる必要がある。それには名もしい小寺より、由緒ある寺を選ぶに相違ない。増上寺は室町時代から重要な学問所であり、大樹寺開山愚底上人の師僧了庵上人は、増上寺開山聖聡上人の孫弟子に当る。つまり大樹寺は増上寺の流れを汲む寺で、増上寺は本家筋に当る。だから江戸に入った家康が、大樹寺の本家になる増上寺を菩提所に決めることは当然であり、何の不思議もない。

それはともかく、慶長四年（一五九九）には御陽成天皇から紫衣の勅許を賜わった。慶長十年には増上寺の大造営が開始され、數年を費して天下無双の大伽藍が完成するとともに、慶長十三年には常紫衣ならびに勅願所の繪旨を賜わり、同十五年には、存心上人に普光親智国師の国師号が下賜された。これらはすべて家康の援助によるものであり、家康の社会的地位が大きくなるにつれて、増上寺そのものも大きくなっていった。さらに家康は慶長十八年までに寺領千石を安堵し、高麗・元・宋の三大蔵経を寄進して寺内の整備につくし

た。こうして鎌倉光明寺の下に位置していた増上寺は、本寺の光明寺をさしおき、総本山知恩院と肩を並べるまでになり、実力は浄土宗第一になった。元和元年（一六一五）ごろになると檀林の筆頭として沢山の所化をかかえ、僧録所として一宗を統制する機関となつていった。家康としては名実ともに將軍家の菩提所に恥じない立派な寺院にしたかつたに相違ない。

三

元和二年、家康が死ぬと増上寺で盛大な葬儀が行われ、安国院殿廟が造られた。その後本堂をはさんで南北に御霊屋が作られた。南廟には秀忠廟と夫人崇源院の靈牌所、北廟には家宣と家継の廟があり、桂昌院・天英院・月光院・広大院・慎総院・昭徳院・静覚院宮などの石宝塔あるいは銅宝塔など、合せて南北兩廟の建造物は七十余棟あつた。これらをまもる別当寺院ができ、多くの寺領も加増されていった。こうして承応元年（一六五二）ごろの一山には百二十余の建物が並び、常時三千名にのぼる学僧がいたという。一山寺院のうち御霊屋別当寺院となつたのは宝松院・惠眼院・最松院・真乗院・瑞蓮院・仏心院・通元院・安立院・岳蓮社・松蓮社・鑑蓮社の十一か寺、念仏道場（蓮社寺院）は惠照律院・妙定院・西蓮社・福聚院・清光寺・安蓮社・宝珠院・清林院・心

光院・一経院の十か寺、坊中の子院は、広度院・天陽院・瑞華院・花岳院・天光院・良源院・常照院・観智院・貞松院・雲晴院・源流院・威徳院・瑞善院・月窓院・徳水院・池徳院・昌泉院・光学院・安養院・月界院・華養院・良雄院・源興院・常行院・浄運院・源寿院・林松院・源宝院・隆崇院・清光院の三十か寺である。

こうして江戸時代の増上寺は、数度の火災にあったが、そのつどすぐ復興され、天下の名刹として注目された。幕末の異変、明治維新、廃仏毀釈など、世の中は落ちつかなかったが、明治二年（一八六九）には再度勅願所となり、明治八年には大本山となった。そして明治十一年東部本山となつて管長をおいたが、まもなく廃止された。明治四十四年には焼失し、その完成は大正十年（一九二一）までかかったが、その後さらに諸堂が完備していった。ところが昭和二十年（一九四五）また戦災で焼失した。これも間もなく復興したが、浄土宗開宗八百年を記念して、夢の殿堂を建造する話がちあがり、昭和四十九年、近代技術も駆使して大伽藍が完成、境内も整備されて近代的な中に古典を生かした寺院に生れかわった。

なお昭和三十八年、徳川家の廟所は改葬されて現在の墓所に移されたが、このとき人類学・考古学・建築学・美術史な

どの学者によって調査され、学界に貴重な資料を提供した。寺宝のうち重文法然上人伝二巻は慶長十五年存応上人が国師号下賜のため参内したとき、後陽成天皇から賜わったものという。なお宋・元・高麗の三大藏経は、家康が大和円成寺（高麗）・伊豆修禅寺（元）・近江菟山寺（宋）から求めて寄進したもので貴重なもの。その他絵画には浄土五祖図、五百羅漢像などがあり、彫刻としては家康の守本尊であった黒本尊をはじめ、三門楼上の釈迦三尊、十六羅漢像と歴代大僧正木像三十体がある。多くの古文書・古記録類は数度の火災で焼失したが、まだ多くの日鑑と数百通の古文書が現存し、史的解明に役立っている。

戦災をまぬがれた建造物は、三門、大経蔵、黒門、御成門などがある。境内には享保一年（一七一六）町火消の殉職者を供養した供養碑があり、グランド將軍手植のアメリカ松が人々の目をひいている。

最大の年中行事は、二月に行われる伝宗伝戒加行道場と十月に行われる聖書道場である。春秋彼岸会、お盆会、御忌などには特別伝導が行われてにぎわう。信仰方面では緑山会・共生会・光明講があり、社会事業方面では長寿会がある。また研究面では三康文化研究所があつて、仏教文化研究面に高い評価をうけている。



いとし子をすくう念仏

○
最近、幼いいたいけな子供の死に出会って心痛めることがしばしばございました。若い父親が、辺りはばかりことなく涙を流しながら、「はやく生まれかわって、また父ちゃんのところへ生まれてこいよ」と声をしほって小さい棺にすがり泣きくずれる姿にどう慰めてよいか、そのすべも知らず、ただおろおろするばかりでした。

そのとき、ふと万葉集にでてくる山上憶良の歌を思い出したのであります。

若ければ道行き知らじ幣はせむ

黄泉の使負ひて通らせ

この歌は、「年もいかなない幼い者だから、道も知るまい。贈りものはしますから死の国の使いよ、背負って通らせてください」というような意味でありましょう。子供を亡くした親の願いが切々とひびいてくる歌であります。子供を失った悲しみの親の心は、万葉の時代も、今の時代も変わりはありません。ただただ、お念仏を申して、阿弥陀親さまにおねがいするだけでした。

「土佐日記」をみましても、大きな心情の一つは、任国土佐で子を亡くした作者紀貫之の悲歎でありましょう。「死んじ子顔よかりき」と書きつけています。まことに、子供の死顔は純にして美しく、あどけなく眠ってい

るようであります。胸の上で組み合わされた小さい手は、心につきさすほどの悲しみをおぼえさせます。世俗の汚れを知らないところの真実の清浄のすがたを拝むのであります。

○
その子が生後間もない子であればあるほど、生まれぬ前に還ったという思いがますますするのであります。大人の死と子供の死と本質的に変わるものではありません。といたしますと、私たちの死も、生まれぬ前に還ることでありましょうか。よかれあしかれ、その世界は、私たちの「ふるさと」であることだけは確かだという気がいたします。

現代の私たち日本人のインテリと称する人びとに、無宗教を誇りとしている傾向がございいます。それは宗教を愚痴蒙昧の者の妄信、迷信にはかならないという偏見に立っているからでありましょう。なるほど、宗教の名のもとに恐るべき迷信、邪宗の存在することも否定することはできません。病気を直すための宗教、金儲けのための宗教など、多々あります。

しかし、真実の宗教は、いくたの宗教的な天才たちが、生涯いのちをかけて求道のすえに悟った自然法爾の理法そのものであります。

現代の人びとは、人間が最高の存在であると考えています。そのため無限に量りしれない自然に対しても、征服すべきものであり、人間の作りだした科学こそが万能であると考えています。なんとこの錯覚をおこしていることでしょうか。私たちの祖先が「おかげさま」「もったいない」という言葉であらわしてきた「大いなるもの」に対する畏敬と謙虚な心を失ってしまったのであります。

人間が最高の存在であるということが、そ

のまま自己が最高であることであり、人間性の尊重ということが、そのまま本能的衝動の無条件肯定につながってきているのではないのでしょうか。一概にはいえませんが、最愛の夫を気がくわないと殺してみたり、わが子泣き声がうるさいとして可愛い子を絞め殺す親がでてくるのは、やはり、人間存在の根本的認識のあやまりが、さまざまの事件をおこしているのと見ることもできるような気がいたします。

○
子を亡くした親は、かならず手を合わせて頭を垂れてうなだれています。その深い悲しみの姿は見る人の心を打つものです。

しかし、それは単なる悲しみゆえでありましょうか。それだけではありません。合掌にはもっと根源的な人間のあるべき真実の姿があります。

私たちは、人間の合理的な判断や力の全く及ばない事態に会うとき、はじめて手を合わすようになります。そしてその手が胸の上で固く合わされるとき、私たちの頭は自然に下がるようになります。それは作法でも習慣で

ありません。国境を越え、民族を越えた人間性の自然であります。人間のこざかしい分別や営みをこえて、大いなるもの、無限なるものへの絶対帰依の姿であります。

人生の最大の悲しみは子を亡くした悲しみでありましょう。「親の命日は忘れるが、子供の命日は忘れられない」と述懐した人があります。なるほど、親の愛の力も及ばない世界に離れ去ったわが子。親も知らぬ死出の旅路をいかに一人さまよい行くでありますでしょうか。

小足にてたどりゆくらん死出の旅
道知れずとてかえり来よかし

と愚痴と知りつつも願わずにはおられない親心がそこにあります。

ただ、人間の思慮を絶したものに「黄泉の使負いて通らせ」と願い、さらに無限なるものに祈る思いが合掌となり、なむあみだぶつと称えることになります。すべてを生かし、死んだ子の命も永遠の生命につながれて、死を超えて生きる道、これこそ、お念仏のみこころであります。

(M・A)

法然上人靈場めぐり 第九回

村上博了

第十七番札所

洛西 嵯峨

二尊院

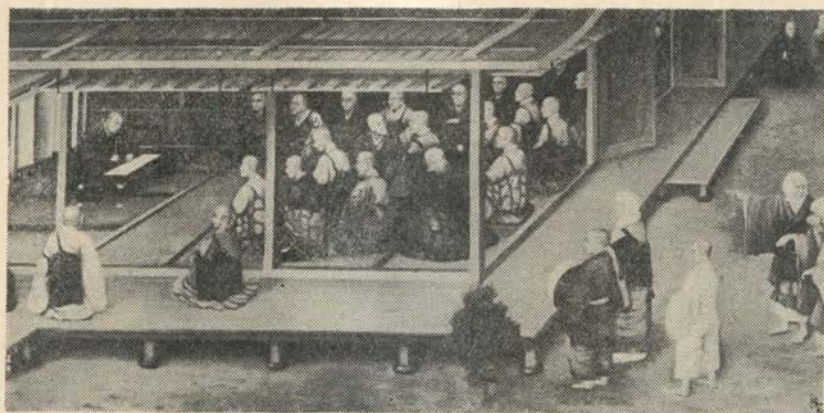
(一)

二尊院は華台寺又は阿耨菩提寺と呼び、京都市右京区嵯峨二尊院門前長神町にある。承和年間、嵯峨天皇発願慈覺大師開山であつたが廃絶、法然上人が「英庵を結びてかよい給し地なり」と再興、念仏堂を建立された靈場である。院名は本

尊として阿弥陀如来と釈迦如来（鎌倉初期時代仏師春日作・重文）の二尊を安置するから名付けられた、四宗（天台、律、法相、浄土）兼学寺院である。現在は天台宗に属する。二尊院山号を小倉山と云う。後山が小倉山であり定家卿が小倉百人一首選定所、春は緑り秋は紅葉で天下に鳴る名所である、公卿文人黒客常に杖をひく所であつた。たまたま嵯峨の隣接地太秦は上人母秦氏の勢力地であり二尊院跡地であつたから、上人暫住の聖地となつたのであらう。湛空（正信）がゆづりうけた。

(二)

上人と湛空とは師弟と見るより父子の間柄のようであつた。上人四国迂座の時も数多の門下の中から選ばれてお伴している。その関係の一端を物語るものは貞永二年正月廿五日



法然上人の御遺骸を一時ここに埋めその分骨を安置した処

〈知恩院所蔵〉

のことであった。上人十七回忌に西山粟生野で荼毘し、遺骨を宝瓶に収めて幸阿弥陀仏に託したのである。幸阿は鎮西へ下向する時、上人遺骨を隠室のぬりごめに塗りかくして出立した。湛空等二十八僧は、そのことを少しも知らないで、貞永二年正月二十五日御遺骨を迎えに粟生野幸阿の坊に行ったのである。留守居の者から幸阿不在の由をきいて止むなく、かぎをたづねたところ「塗ごめひらくべからず」と固く申渡されて鍵はなかった。湛空ら一同びつくり仰天、戸をおせどもひけども動く様子もない。その時、湛空が

御在世ならば、湛空が伺いましたと申し入れなば、空しく帰ることもあるまいに云云

と泣き泣きくどいたのである。その時、どどと物凄いい音が突発塗ごめがくづれるばかりであった。自若としていた湛空が側の門弟信覚に「今一度、戸を押し開き玉へ」と命じたのである。信覚は法衣の両袖を肩にしぼって戸に手をかけると軽く開いた。御伝には

なげき申す、をもむきを聞召入れられると伝えている。遺骨を二尊院の西の岸に造った雁塔に納めたのであった。

(三)

御詠歌は

あしびきの 山鳥の尾の しだりをの

ながながし世を いのるこの寺

と云う上人の御歌である。上人は歌人ではながが現存する幾首かは道歌であり名歌である。あしびきのとあつても悪しではなく、足であり山鳥にかかる枕言ばである。上人七十二歳元久元年十月山徒蜂起し眞性座主に、念仏停止を訴う。上人

第十八番札所

京都 東山

月輪殿

(禪閣兼実廟)

(一)

第十八番札所は古米数ヶ所が伝えられている(一)は東山禪閣兼実公廟所(二)は洛西太秦西光寺(三)は嵯峨月輪寺等である。本

は十一月七日座主に起請文を呈し更に門下百九十名連署「七箇条起請文」を作り、門徒を誡められた霊場である。又足曳き御影と尊信される関白兼実公が宅間法眼に写させた国宝上人像、上人が重源をして宋国から請来した国宝浄土五祖像等が所蔵されている。

国鉄嵯峨駅、京福鉄電嵐山駅下車1km位近くに釈迦堂清涼寺、天竜寺あり。

文では古例に従って御廟所を挙げる。京都東山旧兼実邸内に廟所があった。現在は東福寺境内にある。

上人と公とが知り合つたのは文治五年中秋八朔節句―八月一日のことであつた。上人五十七歳公四十歳である。公は上人の浄土宗と念仏往生について聴聞、ついで八日には上人を請じて受戒念仏以来毎月の例となる。勅修御伝中十七ヶ所に見えていることによつても、その念仏信仰を通じ結ばれた親密さが判る。公が東山に月輪殿を造立された時には、

例もなき屋を 一字指揮を下されて立てさせられけり

と御伝は伝う。その目的は「はや上人の御休みどころなりけり、老者にて、おはしませば、先づここにて休めたてまつりて、のち御対面あらんためにぞありけり」とあるように至誠心からのあたたかい親交であつた。



九条兼実の邸宅といわれ頭光踏蓮の奇瑞のあつた処

〈知恩院所蔵〉

(二)

建久八年のこと、上人がお体をそこねられ翌元年元旦から草庵にこもって、別請があつても外出せられなかった。心配されたのは兼実公である。この時、上人は六十六歳、公が四十九歳であつた。人生は無常である。上人にもしものがあつては一大事、永久にとりかひしがつかない。早速右衛門尉重経を使として「浄土の法門、年来教誡を承るといへども、心腑におさめがたし。要文をしるし給わりて、かつは面談になずらい、且又後の御かたみにもそなえ待らん」と願われた。そこで、上人は門弟安樂房（後四章から感西房）を執筆者として、立教開宗の要文を十六章とし一軸にまとめられ「選撰本願念仏集」と号して公に贈られたのである。漢語灯録には、上人四月八日花まつり会に「歿後遺誠文」を作つて、示寂後の教団の在り方に付、教誡されているから、少くとも三月中には選撰集は選述されていた。

(三)

御詠歌は

月影の　いたらぬ里は　なけれども

眺むる人の　心にぞすむ

という。阿弥陀如来の光明は十方世界を照らし念仏の衆生を攝取して捨て玉わずと、衆生済度大慈大悲の意の手をさしの

第十九番札所

京洞院西

法然寺

(一)

第十九番札所は、現在京都市右京区嵯峨天竜寺立町にある法然寺で、法然上人が開山、熊谷蓮生坊が開基である。熊谷発心について種々の伝説がある。しかし当寺に伝えられるものは、嘉永二年摂津一の谷で源平合戦の折であった。熊谷直実はやむなく無官大夫教盛を討ち果した。その時教盛が「よ

べられて下さるが、その慈光を早く受けとめ、各自の仏性を育て、往生の大利益を成就いたし度い、専修念仏によって上品往生せしめたいとする有難い道歌である。公は浄土宗外護の第一人者であった。

ろい」の上にかけていた母衣（ほろ）に南無阿弥陀仏と書いてあったのである。筆者は当時念仏上人として有名な法然上人であった。血気の若武者が何故「母衣」に南無阿弥陀仏と書いたものをかけていたかと疑問に打たれた熊谷は、聖覚法印を通して、法然上人を黒谷の禅房に訪うに至ったのである。上人は熊谷の素直な疑問に対し懇切丁寧に、本願念仏のありがたさ尊さと如来の本願をくわしく説かれた。感激した熊谷は、上人に従って出家剃髪染衣し名を蓮生と改め、上人の弟子となつてしまった。

是より先、嘉永元年五月三十日、源頼朝は熊谷の武功を賞し、武蔵旧領を復しその地頭に任じた。それらのこともあり一度武蔵に帰えることとなった。暫しの別れといい、上人の御影を頂きたいと誠意を傾けて懇願したのである。上人もその深志に応じたまい、自から影像を彫刻して蓮生に賜わった。その影像が本堂内陣向つて左側の柱に掛札で

円光大師 五十三歳自作尊影賜熊谷蓮生



熊谷蓮生が法然上人の像をこの寺に安置した処

〈知恩院所蔵〉

としるされ、庶人に結縁されている。

(二)

ある夜のことである関東の在所の城にいた熊谷は、上人影像から早く有縁の地に安置せられたいと夢告された。熊谷は上人像を護持して入京、錦小路東洞院の辺りにさしかかった時、にわかに上人像が重くなり、一步も動くことができなかった。さてわこの地(熊谷父直吉旧館地)が有縁の地ならん一字の草庵を建立法然寺と号した。それが当霊場である。

正応年中伏見天皇御拝あり「極楽殿」の勅額を下賜せられた。応仁の戦火で炎上、天正年中下京区寺町仏光寺に移された。後奈良天皇御脳の時霊験あり、勅願所に補されたのである。

御詠歌は

ただたのめ よろずの罪は 深くとも

わが本願の あらんかぎりは

という。本願念仏を唱えると必ず往生する、安心が決定することを示さる。寺宝は上人肉牙の御舍利、蓮生自作像、敦盛母衣名号、鐘の灯籠等(市、京都バス嵐山下車、京福電車嵐山駅下車が便)



仏説無量壽經 卷下（三）

村瀬秀雄

一世間の貪り

然世人薄俗共諍二不急之事一。於二此劇
惡極若之中一勤身營務以自給濟。無レ尊
無レ卑無レ貧無レ富少長男女共憂二錢財一、
有無同然憂思適等。屏營愁苦累念積レ
慮為レ心走使無レ有二安時一。有レ田憂レ
田有レ宅憂レ宅牛馬六畜奴婢財衣食什

物復共憂レ之。重レ思累レ息憂念愁怖。

横為二非常水火盜賊怨家債主一焚漂劫奪

消散磨滅、憂毒忪忪無レ有二解時一。結二

憤心中二不レ離二憂惱一、心堅意固適無二

縱捨一。或坐二摧碎一身亡命終棄二捐之一

去、莫二誰隨者一。

しかるに世人は薄俗にして共に不急の事をあらそう。この
創惡極苦の中において勤身營務し、以て自ら給濟す。尊とな
く卑となく貧となく富となく、少長男女は共に錢財を憂い、
有無同じくしかり、憂思はまさに等し。屏營として愁苦し、

おもいを重ね、おもんばかりを積み、心に走使せられて安き時のあることなし。田があれば田を憂い、宅があれば宅を憂い、牛馬六畜奴婢錢財衣食什物もまた共にこれを憂う。思いを重ね、なげきをかさねて憂念恐怖す。横に非常の水火、盜賊、怨家、債主に焚漂せられ劫奪せられて消散し、磨滅し、憂毒はしゅしゅとして解く時のあることなし。憤りを心中に結んで憂惱は離れず。心は堅くところは固くして、まさに縦捨することなし。あるいは摧碎によって身を亡ぼし、命が終ればこれを棄捨して去り、誰も隨う者なし。

(意訳)

ところが世間の人々は人情が薄くいやすく、世渡りの仕事にばかり忙しく暮し、自分の欲望(財欲、色欲、飲食欲、名譽欲、怠惰)に溺れ、そのためにお互いに争いごとが絶えない。世相はまさに劇悪であり極苦であるが、その中にあって人々は努めて身を勞し、世事を営み、働いて金を得て暮しをたてている。身分の高い人も低い人も、貧しい人も富める人も、老人も若人も、男も女も同じように皆金儲けのために苦勞を重ねている。このことは資産のあるなしに関係なく同じであった。金錢を欲しがる心は皆同じである。人々は恐れ戦いて憂い苦しみ、常に心から離れることがなく、いろいろと考えをめぐらし、貪欲に迫り廻されて心を安んじる時がまっ

たかない。田畑があれば田畑のことで苦勞し、邸宅があれば邸宅のことで苦勞し、同じように牛馬犬羊豚鶏の六畜、奴婢等の召し使い、金錢ま資産、衣食や器物等を持っていれば持っているために苦勞する。人々はこうしたことに思案に暮れ、嘆きをかさね、心痛し、悲しみ、恐れている。しかも突然に水害火災に見舞われることがあり、また盜賊が入ったり、怨家や債権者がいたりして、財産が流されたり焼かれたり、または奪われたりして、一時にすべての財産が消え失せたり破産したりすることがある。こうした憂いの毒は心を驚かし一時も安心してはいられない。心の中に憤怒の情がこみあげて、絶えず憂い悩むことになる。心はかたく頑固であって余裕がないから、寛容の気持で他を許すことをしない。あるいは外力のために圧しつぶされて身を亡ぼすことがある。もし命を失うことになればすべての財産をこの世に棄ておいて、この世を去らなければならない。しかも誰一人として死者に随ってゆく者はないのである。

二 尊 富 の 貪 り

尊貴豪富亦有二斯患^一。憂懼万端勤苦

若^レ此。結二衆寒熱一与^レ痛共居。

尊貴豪富も亦このうれしいあり。憂懼万端にして勤苦することとはかくのごとし。もろもろの寒熱を結んで痛と共に居す。

(意訳)

身分の高い人も富豪の人も、このように心を苦しめ悩ますことは同じことである。ありとあらゆる憂いと恐れが起つてきて、そのために苦しむことは前と同じことである。あだかも寒さと暑さが一度に襲いきたつたようなもので、あるいは肝を冷やし、あるいは油汗をかいて多くの苦しみの中で毎日を暮しているのである。

三 貧者の食り

貧窮下劣困乏常無。無^レ田憂欲^レ有^レ田、

無^レ宅亦憂欲^レ有^レ宅、無^二牛馬六畜奴婢

錢財衣食什物^一亦憂欲^レ有^レ之。適有^レ一

復少^レ一有^レ是少^レ是思^レ有^二齊等^一。適^レ

欲具有便復散。如^レ是憂苦当^二復求索^一

不^レ能二時得^一。思想無^レ益身心俱勞坐起

不^レ安、憂念相隨勤苦若^レ此。亦結二衆

寒熱一与^レ痛共居。

貧窮下者のものは困乏にして常になし。田がなければ憂いて田のあらんことを欲し、宅がなければ亦憂いて宅のあらんことを欲し、牛馬六畜奴婢錢財衣食什物がなければ、亦憂いてこれのあらんことを欲す。たまたま一つがあれば一つをかき、これがあればこれをかき、齊等にあらんことを思う。欲するにしたがつて具さにあれば、すなわちまた廢散す。かくの如く憂苦して、まさにまた求索すべきに時に得ること能わず。思想して益なく、身心ともに勞して坐起やすからず。憂念は相隨い勤苦することはかくのごとし。またもろもろの寒熱を結びて痛と共に居す。

(意訳)

貧しく身分の低いものは困窮の生活を送っていて、何物も持っていない。田畑を持っていないために田畑が欲しいと憂え、邸宅を持っていないために邸宅が欲しいと同じく憂え、

同じように牛馬犬羊豚鶏の六畜、奴婢の召し使い、金銭や資産、衣食や器物等についても持っていないから、これらのものを持たないものであると同じく憂える。たまたまこれらの中の一つのものが得られても他のものが得られず、これが得られてもあれが得られないという具合であるから、ぜひとも皆同じように得たいものだと思う。欲しいものが次第に得られて全部揃って手に入ったと思うと、次にはたちまちに消え失せてしまう。そこで憂え苦心し再び探し求めようとしても、今度はとうてい得ることができない。いかに思案をめぐらしても益がなく、身心は共に疲労して、日常生活は少しも安らかにならない。このような心痛が相次いでおこり、大きな苦しみにあることはこのようである。そこで貧者もまた同じように寒さと暑さが一度に襲いきたったように、あるいは肝を冷やし、あるいは油汗をかくて多くの苦しみの中で毎日を暮しているのである。

四 怒りの過ち

世間人民父子兄弟夫婦家屋中外親屬

当下相敬愛無二相憎嫉一、有無相通無レ得二貪惜一、言色常和莫中相違戾上。或時心諍有レ所二悲怒一、今世恨意微相憎嫉、後世軋劇至レ成二大怨一。所以者何。世間之事更相患害、雖レ不三即時応二急相破一、然含レ毒畜レ怒結二憤精神一、自然剋識不レ得二相離一、皆当二对生更相報復一。人在二世間愛欲之中一、独生独死独去独来。当レ行至三趣苦樂之地一、身自当レ之無レ有二代者一。

世間の人民父子兄弟、夫婦家屋中外の親族はまさにあい敬愛し、あい憎嫉することなく、有無あい通じて貪惜することなく、言色は常に和してあい違ひいることとなるべし。あるとき心にあらそいて悲怒するところあり、今世の恨むところにすこしくあい憎嫉せば、後世にうたた劇しく大怨となるにいたらん。ゆえはいかに。世間のことはたがいにあい患害し、即時にすみやかにあい破すべからずと雖も、しかも毒を含み怒りをたくわえ、憤りを精神に結び、自然に

剋識してあい離るることを得ずして、皆まさに對生してたがいにあい報復すべし。人は世間の愛欲の中にありて独り生じ独り死し独り去り独り来る。行いにおうて苦樂のところに至り趣く。身自らこれをうけ、代る者のあることなし。

(意識)

世間の人々、親子兄弟、夫婦家族、外戚内戚の親類はまざしく互に敬愛し、互に憎み嫉むことがなく、有無あい通じて助けあい、貪り物惜みすることがなく、言葉や顔色を柔らげ、互に違ひ反することがあつてはならない。もしある時、争いごとのために怒りの心を起したとすると、たといこの世における恨み憎み嫉みのところが僅かばかりのものであつたにしても、後世においては次第に劇しくなつて、遂には大怨となるであらう。何故かといえ、この世において互い害しあつても、怒りの報いを直ちに受けるとは限っていないものの、互いの心に怒りの毒が残り、怒りの情が蓄えられ、憤りの精神となり、これらは自然に心の奥底に刻みつけられて決して消えることがないのである。そしてこの者たちは後世に同所に生れ、互に報復しあうから大怨となるのである。人々は愛欲(財欲、色欲、飲食欲、名譽欲、怠惰)の中で生活し、行いの善惡によって報いを受け、それぞれ惡処又は樂処に趣くのであるが、人々は独りで生れ独りで死し、独りで去り独

りて来るのである。報いは自身で受ける外はなく、誰れも代つてくれる者はいない。

五 何故に道を求めぬ

何不下棄二衆事一各曼二強健時一努力勤二修
善一精進願上二度生一。可レ得二極長生一如
何不レ求レ道。安所レ須レ待欲二何樂一哉。

何んぞ衆事をすてて、おのおの強健の時におよんでつとめて善を勤修し、精進に度生を願わざる。極長生を得べきに、いかんぞ道を求めざる。いづくに待つべき所ぞ、何んの樂しみを欲するや。

(意識)

どうして世間一般の俗事をすてて、身心ともに強健な時に努めて善を勤修し、精進努力して悟りの道を求め後世を願うことをしないのか。涅槃を求め淨土に往生すれば永遠の生命が得られるのに、どうして淨土への道を求めようとししないのか。世間のどこに頼みとする所があるのであろうか、眞の樂しみのない世間に何んの樂しみを求めようとするのであるか。

念佛ひじり三國志

(七)

一法然をめぐる人々

寺内大吉

挿絵 松濤達文画



一

義信房はもと比叡山の東塔にいた荒法師である。

荒法師。

それは修法僧ではなかった。貴人の子弟が学生となって登山してきたとき、彼の身辺を護衛するために同行した武人である。そのまま頭を丸めて比叡山に住みつくが、僧とは全く無縁な、武力だけを売る職業的な暴力者の集団である。

この集団は、いつかそれぞれの主人である学生を離れて、

比叡山全体の護衛人となった。当然幾つかのグループに分流し、山上の政治を左右する兵力ともなった。

世に言われる僧兵であった。

なかに例外者もいた。武力闘争の明け暮れのなかで、真摯に仏法を求めはじめ、姿かたち通りの修法僧になってゆく者である。

義信房もその例外者の一人だった。やがて比叡山を捨てて、ここ西山の広谷へやってきた。遊蓮房円照の庵室から半道ほど離れた谷奥の断崖に小屋をかけて、唯一人、敬虔な修法にいそしんでいた。

すべての俗情を断ちきつたはずの義信房だったが、一つだ

け忘れたいものがあつた。それは寝酒の美味である。

義信房は何か所か猿酒のありかをマークしていた。

猿酒とは大樹の木洞に溜つた雨露が自然に発酵して酒精分をふくむようになった酒である。

何か所かマークしたこの猿酒のありかを義信房は何日かおいてまわり、蒐集してくる。

ところがである。最も美味で、かつ分量にも恵まれた老木の猿酒が、ここ兩三度、いつ出かけても空になつてゐるのだ。

「誰かが盗みにくる」

その朝も乾ききつた洞の底を撫でまわしながら、憤然となつて呟いた。

「わしの許しも得ずに、いったい誰が盗んでゆくのか」

やや不当な腹の立てかたをしている。老木の猿酒は義信房の独占物ではないからである。

「ひよっとすると——」

義信房は斜面を見上げた。この近くで庵を結んでいるのは遊蓮房円照しかない。

だがあの円照は一切猿酒なぞには手を出さない念仏ひじりであつた。

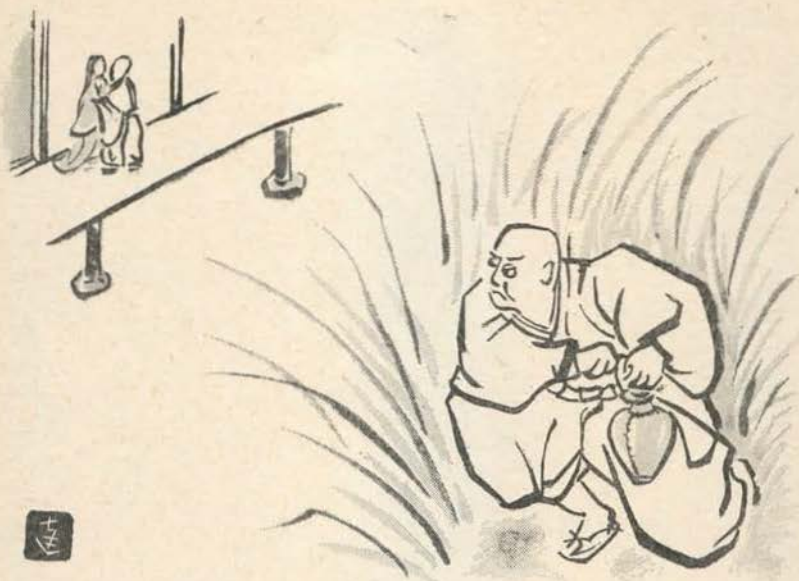
俄かに心変りしたとでも言うのであろうか。

あらすじ

平治の乱は平家一門の全盛をもたらしたが、逆にこの乱によつて信西入道は不幸の死を遂げ、その一門は四散した。だが、十二年の歳月は世の流れをゆるやかに変えて行つた。奈良の小禪師と呼ばれた明通も、南都三論の学匠・東南院の明遍得業として令名を馳せるようになった。一方、崇敬する異母兄の信濃守是憲は今や西山広谷で念仏門に帰依する遊蓮房円照となつてゐた。明遍は父信西十三回忌の折、木幡峠の信西塚に詣で、その足で光明山寺へ登る。そこでかの大仏勸進僧俊乗坊重源に出会う。しかも意気投合した重源の口からはじめて法然房源空というその人の名を聞くのであつた。ある日、明遍は西山に兄円照を訪れるが、法然房のことは兄の心をも強く揺がす。即刻、円照はつてを便りに叡山黒谷へ登り、法然と共に感動的な一夜を過す。承安元年（一一七一）の春、比叡を下りた円照は、都で琵琶法師生仏と知り合い、父信西の元の忠臣西光法師のもとに導かれることになるが、今また、前の太政大臣忠雅の娘藤原貴子とめぐり合う機縁を与えられる。

義信房は、巨体を這わせて円照の庵室の方へ登つていった。孤独狷介な男だった。表から訪問して、米意を告げられない陰湿な性格である。庵室へ接近すると、いよいよ姿勢を低くした。草むらに這いつくばつて、じつと庵室の様子をうかがつた。

＜疑心の義信房＞



誰かが円照と言葉をかわしている。相手の黄色い声が、まず義信房を動揺させた。まさしく女人の声ではないか。声がやんだ。

義信房が中腰に姿勢を上げて覗くと、今しも水々しい黒髪の女人が庵室から走り出てきたところであった。

「いけませぬ……こんな日中では、いけませぬ」
拒絶ではない。その声は笑っていた。

次いで追って出たのが庵室の主円照だ。

女人は庵室の外壁によりかかって立った。追いついた円照の身体が、そこで重さね合わされた。

「痴れ者奴がッ！」

草むらのなかで義信房は憤然となった。

これまで尊崇の眼で見守ってきた円照観が逆転した。庵室に女人を囲い、日中から痴戯にふけるとは——

単純な義信房の怒りは、狭い空間でしか回転しない。

「わかったぞ。猿酒を盗むのは奴らにきまっている」
とにかくおのれの領分から猿酒を盗んでゆく奴だけが憎らしいのである。

頬つべたをふくらまし、怒りの吐息をまき散らしながら義信房は庵室の方へ帰りはじめた。どんな方法で彼奴らに復讐してやろうか。そのことだけしか考えていない。

谷添いの小道まで降りてきたとき、下流から登ってくる人影と出会った。僧である。界限では見かけぬ顔である。

未知の僧は合掌すると、深々と腰を折った。ちよつと狼狽して義信房も返礼した。

「遊蓮房どどのの庵室はどのあたりでしょうか」

丁重にたずねてくる。

「遊蓮房……」

憤怒が義信房の胸で再燃した。

「この谷合いのあたりと聞いておりました」

「そなたも修行僧じやな」

「比叡山からやってまいりました」

「比叡山はどこか」

「西塔の黒谷別所におります」

「黒谷の別所では念仏ひじりじやな。およしなされ」

「何がですか」

ものやわらかな眼を格別に動かさずにこの中年僧は義信房を見た。

「遊蓮房なぞを訪ねるのはおよしなされ」

「なぜでしょうか」

「なぜかだと……いってみればわかるわい」

たいへん矛盾した捨て台詞を残して、義信房は大腿で立ち

去ってしまった。

あんなところは訪ねるな、と言った。しかも次には、出かけていっておぬしの眼で見えて来い、なのである。

かんじんの庵室への道は教えてくれない。

修法僧のうしろ姿を見送り、立ちつくした叡山の僧は、やがて頭上で人声を聞いた。

「法然房どのではないか」

「ああ円照どの」

「とうとう訪ねて下さったか」

円照は全身に喜びを発散させ、斜面をころげるように駆け降りてきた。

「此処までは来ましたが、あとの道がわかりませんでした」

「すぐこの上にわしの庵室はある。待っていました。是非あなたに問法したいことがあって」

「いま、すれ違った僧に道をたずねたのですが、剣もホロロでした」

「どんな僧で」

「あちらへ去ってゆきました」

法然は谷の奥を指さした。

「ははあ義信房だな。あれは意地悪る男です」

「何やらひどく怒っている様子でした」

「何やらひどく怒っている様子でした」

「義信房はいつも不平不満のかたまりです。怒っていない方が珍らしいくらいで」

円照は先に立って庵室への斜面を登りはじめた。

途中、何度もついてくる法然をふりかえった。その顔を少しげしげと覗きこんだ。

いたわりではない。恐ろしいのである。

この先輩は、自分の現状をどのように分析するであろうか。どのような決断を下すことであろうか。

しかし何と言われても、もはやあの貴子とは別れ難くなくてはならない自分を、円照は再確認するのであった。

二

法然は遊蓮房円照の心情を、底の底まで見通してしまつたかのようにあった。いや、ひとり円照だけの心底ではない。彼のかたわらに並んで坐る藤原貴子の心も、である。裁きの言葉を待って、しおらしく、かつおのいて端座する一組の男女。この深い人間関係の実体を的確に見通してしまつたかのようにあった。

「いまのお二人は、まじりつ気もない愛情で結合されている。それが何の罪でございましょうか」

法然は明確に言いきった。

「しかし法然どの。わたしは出家の身だ。それが女人と……」

「僧も俗もございませぬ。正しい愛情はいかなるものにも犯されてはなりません。また非難されるものでもないのです」

「女犯の罪は——」

「それは、ただ肉慾を目的として、女人をもてあそび、ひとときの快楽の生けにえとするから責められるのです。一人の男が一人の女人を終生愛しぬくことに何の罪咎（とが）がありませんか」

「法然どの。わしはこの人を終生愛しぬくつもりです」

「判っています。ひと眼見たとき、あなたがたが戯れの愛でないことが判りました。ただ……」

「ただ……何でしょうか」

「円照どのには言わずがなのことでしょうが、あなたは仏弟子。とすれば最愛のこの人を立派な仏弟子となるように導かねばなりません」

「ああその点では」

と、貴子が感動の言葉を投げ入れてきた。

「円照さまは、二人がこうなつてから、いよいよきびしく妾を導いて下さっています」

「そうでしょう。円照どのなら当然さうだ。私は比叡山や高

野山が女人禁制をしていることにいつも疑問をおぼえてきました。清浄な結界だと称しながら、鳥や獣はあの山に棲んでいます。それがなぜ同じ顔かたちをし、同じ心を持った女人の入山を拒むのでしょうか」

「……」

「自信がないからです。自分たちがしている修法に自信がないからです」

「自信が……」

「そうなんです。この結界に女人をまじえたら、たちまち獸性と化する自分を知っているからです。ということは、その修法自体が間違っている証拠ではないでしょうか。円照どの、どう思いますか」

「そのとおりだ。女人を蔑視し、汚物と考えて遠ざける修法自体に誤りがある」

「自力修法は、このように行き詰まるのです。汚れを捨て去って、一切見ない、聞かない、言わない決意を固めます。それ自体の外見は立派だ。しかしひとたび決意が崩れたとき、どうなるのでしょうか。女人を見れば野獸となつて飛びかかつてゆき兼ねないのです」

「法然どの。一つ質問をさせてもらえませんか」

「どうぞ。何なりとも」

「あなたは女人と、わしのような関係を持った経験がありませんか」

「それは、ありません。私はどの自力修法僧にもまさって清浄な身体で通してきたつもりです」

「それが——」

「そうなんです。それでもなおかつ私の内心は汚れきっております。十悪五逆が渦巻いています。だから判っているのです。この自力修法が誤まっていることを」

「他力しかないということになる」

「弥陀の慈悲にすがるとき道はない。おのれを待む一切のおごりたかぶる心を捨てて、最愛の妻を得たら、彼女ともどもにこの祈りを深めてゆけばよろしいのです」

「法然どの。救われました。わしは墮地獄の罪を覚悟していました。恐ろしい地獄の底に堕ちこんでも、この人と手に手を取ってゆこうと」

「妾もその覚悟だったのです」

「貴子の眼もうるもっていた」

「この世の中は男女で作られています。男女がいなければ、二人が結び合わされなければ、人間は滅んでしまいます。この当然の行為。その中にこそ仏法は生きてゆかなければならない」

「釈尊は、ではなぜ妻子を捨てられたのでしょうか」

「釈尊の場合、王城の生活の汚れを知りすぎていらした。

一人の妻だけを愛することは許されませんでした。その境遇をお捨てになったのです。だから夫婦そろった仏弟子が何人もいたではありませんか。私は思う。これからの世の中、一人の夫と、一人の妻。この正しい関係を守り抜ける夫婦こそ阿弥陀さまの救いを最も深く、量多く享受できる人間だと信じます」

「では法然どのもいつかは妻を得られますか」

「あなたのような美しい女人にめぐり遇えたならば」

やさしい視線を貴子へ投げた。

広々とした自由。復郁とした人間性の暖か味が、三人の座のなかに立ち登るのであった。

そして法然はこの会話に、とどめを刺すように言った。

「妻を持たねば念仏のできぬ人は妻を持つべきです。また妻を持って念仏のできぬ人は、妻を持つべきではないでしょう。多分この私は、後者の方だと思いますよ」

話題はそれから藤原貴子の前夫だった皇円阿闍梨の奇数な終焉のことに及んだ。

もちろんその膝下で数年間学んだ法然は、懐旧の情をかくさなかった。

ただ蛇（みづち）往生に話が發展したとき、法然は悲しげに表情をゆがめた。

「当代無双の知識人だった皇円阿闍梨が本気でそのようなことを信じていたのでしょうか」

「妾にもくり返しお話になりました。話だけではなく、せつせと蛇の肉を食していらっしゃいました」

「蛇ほど弱くて、怠け者の生物はいないのでしょ」

「そんなに弱いものかな」

円照は眼を光らせて問い返す。

「蛇はいつも眠っています。眠たくてたまらないのです。蛙や鼠をひと呑みで呑みこんでしまう。それを消化させるために、いつも眠るんです。もちろん冬が来れば眠ったきりです。しかも彼の寿命はたいへん短い。じきに土中の穴の底で枯れ果てて死ぬのです」

「五十六億年も生きられないんですね」

貴子はホッとしたような顔で言った。未だどこかで蛇身と化したあの阿闍梨が自分を凝視しているようで、不安だったのである。

「とんでもない。ましてそんな蛇が弥勒さまの復活に遇えるなんて」

円照は内心で驚きを禁じ得なかった。智恵第一の法然房と

は、呼ばれている。それにしても蛇の生理学にまで通曉していたのだ。

呪術ではない――

と、円照はいま確信をこめて法然の考え方を支持することができた。

法然はものごとを、正確に知りつくしていたのだ。その正確な知識の上に立って、他力念仏への信仰を打ち出している。これは神秘的な呪術ではなかった。生きている人間の実証主義が根拠を支えていたのだ。

漠然と呪術の誤まりを信じてきた円照は、いまこそはっきりと新しい道をさぐりあてた思いであった。

この新しい道は、法然房を先頭に立てて踏み固められてゆくはずである。

三

法然は西山広谷の遊蓮房庵室に四日間ほどいて比叡山へ帰った。近いうちに必ず此処へ移り住むことも確約した。

「三人そろって朝な夕な、念仏生活に明け暮れようではありませんか」

莞爾たる笑みを円照夫婦へ投げかけた。

「そのころにはこの庵室も少しはましなものになりますよ。わしの昔の部下が房舎を新築してくれる約束になっています」

円照の顔も明るかった。

西光法師との約束だったが、この声が聞こえたように法然が去って数日すると、工匠が職人をつれて広谷へ現れた。新しい房舎の建築を始めたのである。

房舎というよりもそれは一箇の寺院建築に近い規模だった。持ち運ばれた材料も豊富である。

「西光の奴、大げさなことをやりおる」

しかし円照の表情は決して不快なものではなかった。

「どこかで立派な阿弥陀さまのお像をさがして来ないと、いけませんね」

貴子の声もはずんでいた。

いま二人の、新婚の園が造築されようとしている。愛の時だけではない。そこで最も人間らしい信仰生活が営まれる精舎なのである。

工事現場は活気にあふれ、手ぎわよく進行していった。

草の繁みにひそんで、毎日この工事現場をうかがっている男があった。義信房だった。

「神聖なこの修法の地を、ただれた愛慾で汚がされてたまる

ものか」

義信房は、いつも夕方、憎々しげに呟きながら、おのれの庵室へ帰ってゆく。

工事はほぼ完成した。あとは内陣に本尊仏の阿弥陀如来を安置するだけで、良いことになった。工匠や職人は都へ帰っていった。

そんなある日の夕方であった。

貴子は板の木の下に立った。もう猿酒が洞に溜まっているところである。壺へ掬いに來たのである。

計算どおり、幹が太い枝を辰巳の方向へ突き出した付け根の窪みに、波々と液体がたたえられてあつた。鼻をつく香りに貴子はうっとりとする。

この美酒が、自分に新しい幸福をもたらししてくれたのではないか。円照さまは荒びた男性になつて下さつた。

法皇や老阿闍梨からは求められなかつた幸福だ。何よりもこの猿酒に感謝しなければならぬ。

貴子は二本の指を液面に触れた。唇へ持つていった。強い酒氣が唇を火照らせた。

微笑がこぼれる。幸福の味というものか。

しかし貴子の微笑は、次の瞬間、口もとから消えた。猿酒に濡れた唇が硬直した。

顎（おとがい）の下に、がっしりと太い腕が喰いこんできたのである。

「お前だな。いつもひとの猿酒を盗んでゆく奴は！」

野太い声が耳たぶを撫でた。荒々しい息づかいに殺氣がこもっている。

必死にもがくと、幸わい腕の輪がゆるんで、貴子は二三歩飛び去ることができた。

相手の顔をまともに見た。

「義信房さまではございませぬか」

二度ばかり遠くからではあつたが、見かけたことがある。

「そうよ。義信房で悪いか」

「猿酒はお山のものです、あなただけのものではございませぬ」

「何をぬかす。近ごろ山へはいりこんできたくせに……第一お前は女人の身で聖地に居坐つて、しかもあの遊蓮房と怪しからぬ振舞に及んでおる」

「怪しからぬ振舞なんて……妾と円照さまとは純粹に愛し合っているのです」

「純粹に愛し合っているのか。修法のひじりが純粹だろうと不純だろうと、女人と愛し合うこと自体が怪しからん」

「妾は円照さまの愛を頂きながら、信仰の生活へはいつてき

＜貴子の危機＞



たのです」

「汚がれた女に、仏法の信仰がわかってたまるものか。お前ができることは、愛し合うただれた生活だけじゃ」

義信房の巨体が迫ってきた。

逃げようとして、貴子は草むらにひそんだ栃の根に蹴爪づいた。前のめりに倒れた。

荒法師はそのまま背後からのしかかってきた。

「さあ教えるんだ。このわしにも、その純粹な愛しかたとやらを教えてくれ」

首根っ子を大地に押さえつけると、荒法師は狼藉に貴子の裾へ手をかけてきた。

膝をすぼめ、身をゆすって抵抗しているうちに貴子の身体は半回転してしまった。すぐ眼前に義信房の醜い顔が迫っていた。

淫らに笑っている。

瞬間、あの日聞いた法然の言葉を思いうかべていた。

——自力修法は外見こそ立派だが、いったん崩れたときは野獣と化す。

だが、思いはかすめただけで、貴子はいつまでもそんな言葉にこだわっていることは許されない。現実はきびし過ぎた。

前腕が再び顎の下に喰いこんできて、息も止まりそうだが、
しかも残った腕は着衣の奥へ乱入してくるのだ。

「義信房さま。妾は舌を噛みます。そんなことをなさると」
苦しい息のなかで貴子は叫んだ。

「ふん、噛まずともよいわ。こうしてくれるわ」

どうしても開かない膝頭に諦めたか。義信房はその手を抜くと、貴子の細い頸へ当てた。両手の拇指に力をこめた。

「ああ……円照さま……」

かほそい叫びが貴子の絶句となった。

それでも未だ仮死の状態であったのかも知れない。

義信房は貴子の着衣をすべてはぎ取ってしまった。全裸に
むいた女体の上で、荒々しい慾望を満たした。

いや生気を失った女体は、何ものも満たしてはくれなかつたのであらう。荒法師は怒り狂って叫んだ。

「この女！ まだわしを、さげすんでおる！」

再び両手を貴子の頸にかけた。渾身の力をこめて絞殺した。

激しい野獣の闘争は終わった。義信房はげんなりした表情で、すでに死屍となった貴子のかたわらへ坐りこんだ。

そのときだ。するすると白い裸身の上へ這いのぼってきた
黒い生きものがあつた。

三四尺もある草蛇だった。貴子の腹や乳房のあたりを彷徨している。

義信房は草蛇の頸部をつまみ上げ、死者の顔へ近づけた。
救いを求めて草蛇は尻尾から貴子の首に巻きついていった。

「さあ咬むんだ。此奴の取り澄ました顔を無茶苦茶に咬み千切つてやれ」

毒蛇ではなかった。咬むすべを知らないのである。苦しいに口をひらき、長い舌を泳がせるだけだった。

「不甲斐ない奴！」

怒声とともに義信房は指先に力をこめた。鈍い響きを残して、草蛇の頸部が砕けた。貴子の白い頬の上へ投げ棄てた。

草蛇は死に絶えたが、貴子の首に巻きついた胴体はほぐれなかった。あたかも蛇姓と化した皇円阿闍梨が現前したかの
ように、しっかりと貴子の首に巻きついていたのであつた。

義信房は足もとをよるめかせながら、柵の樹下から立ち去つた。

粗雑な心にもやはり淡い後悔の念が兆ざしたに違いない。

(つづく)





国師号宸翰

増上寺の宝物

宇高良哲

(大正大学専任講師)

後陽成天皇自筆観智国師号勅許宸翰

これは慶長十五年(一六一〇)七月十九日、増上寺十二世源誓慈昌存底が、普光観智国師の国師号を勅許されたとき、後陽成天皇が特に国師の徳を讃歎して与えられた天皇自筆の宸翰である。非常に墨痕鮮かな書体であるが、読み方は

勅す、法に取舍なく、用に機に臨むを貴ぶ、時に循環

有り、心物に應ずるを存ず、明珠濁水を避けず、大聖寧ろ一隅を守る、慈昌和尚は淨社の英雄、教門の碩匠なり、智弁闍起、万水の朝を取めるがごとし、才徳斗明、衆星の供を受くるに似たり、十惡の妄性を引接し、三界の迷靈を濟度す、親しく竜顔の福座に対す、安心の秘要を奏し、益す吾宗の布教を重ぬ、達志の美譽を挙げ、肆に褒章を加う、新たに宸翰を染め、特に普光観智国師の号を賜う、

慶長十五年七月十九日

僧侶の国師号勅許は禪宗に多く見られ、浄土宗では寛正三年（一四六二）清浄華院の等照の慧照国師以来、源誉慈昌存応の勅許が二人目である。国師号勅許は朝廷の権限であるが、存応の国師号勅許の準備は幕府の強力なバックアップによってなされたらしく、徳川家康は京都所司代の板倉勝重に命じて朝廷と

増上寺 経蔵

の接渉にあたらせただけでなく、存応が勅許後、御礼のため宮中に参内した時の進物品まで幕府の方で準備しているほどである。いづれにしても、この源誉慈昌存応の国師号勅許によって増上寺は浄土宗を代表する寺院の地位を確立したのであり、この宸翰は能書家後陽成天皇の書としてだけではなく、増上寺にとつては非常に重要なものである。

経蔵は一切経を奉納安置する建物であるが、その内部の構造によって転輪蔵とか輪蔵と呼ばれるものもあった。経蔵は本来經典の披読の便宜をはかるために造られたものであったが、輪蔵になると、文字を知らない人でもあつてもこの經典を取めた輪蔵を回転することによって、受持して読誦したのと同じ功德があると考えられ、経蔵そのものが参詣の対象とされた。

増上寺の経蔵は九間半四面の土蔵づくり

で、内に六角の輪蔵が収められており、後者の典型的な代表である。増上寺の経蔵は徳川家康の命で建てられたものであり、山門と共に江戸時代の増上寺の姿をとどめる数少ない建造物である。そのため現在東京都の重要文化財に指定されている。また経蔵内部には国宝に指定されている三種類の一切経が収められている。これらの一切経は徳川家康が全国の一切経所蔵の寺院を探索して、その中から特によりすぐったものを増上寺に収めたもので

あり非常に立派なものである。

即ち、家康は慶長十四年三月大和円成寺の什本であつた高麗版の大蔵經（綴本）六千五百三十一巻を、寺領二百三十五石と交換で求めて増上寺に寄進している。高麗版大蔵經は非常に質の高いもので、日本では京都の建仁寺と増上寺だけにしかない珍しいものである。翌年には伊豆の修禪寺の什本であつた元版の大蔵經（折本）五千九百三十一巻を寺領四十石と交換で召し上げ増上寺に寄進している。そして慶長十八年には近江の菅山寺の什本であつた宋版の大蔵經五千八百四十七巻を寺領五十石と交換して増上寺に収めている。このようにして増上寺には全国でも稀な三部の一切経が完備しているのである。

この経蔵の建立年時であるが、現在経蔵の前に立てられている東京都の文化財指定の揭示によると慶長十年の建立とされているが、前回の『徳川家康の増上寺本堂造営年時考』の中でも触れたように『縁山志』以下の諸本は慶長十年に増上寺の拡張工事が行われ、本堂以下諸堂宇が完成したと記しているが、最近発見された幕府の工頭であり、増上寺造

營工事の責任者であつた中井大和守正清の書状によれば、増上寺の造營工事は慶長十四年から始められ、本堂が慶長十六年四月完成していることがわかる。更に経蔵についても、従来の慶長十年説を否定する新資料が中井家文書の中にある。観智国師の高弟正誉廓山から中井大和守正清に宛てた九月二十五日付の書状には、

万々面談をもつて申述べ候間、許かにあたわず。恐惶謹言。

(追而書略)

九月二十五日

正誉(花押)

中井大和守殿

御報

廓山

遠路飛札に預り候。来意の如く、経蔵の儀、御念に入られ仰せ付けられ候故、結構に出来申し候由、仰せられ候て国師(観智国師)一段と祝着なされ候。定て大御所様(徳川家康)も御覧なされ候はば御祝着なされべく候。随て大工右衛門の事、国師に對し免許なされ候由、懇に披露申し候へば、一入忝じけなく思召し候。拙子方より能々御礼申べくの由仰せ付けられ候。彼の者早々罷上り礼をも申たき由申候へども、国師の作事に取懸り罷あり候間、その儀にあたわず候。将亦拙子も南都へ罷り上るべきの由、大御所様仰せ付けられ候間、近日罷り上り候。

この書状をみると、廓山が増上寺の経蔵が結構に出来上ったことを述べており、この時に増上寺経蔵が完成したことは間違いない。そこで問題になるのがこの書状の年代である。当時の慣習により書状には年号を書き入れていないが、文面より考察すると、存底のことを観智国師と記しており、存底は慶長十五年七月に国師号を勅許されるのであるから、それより後のものであることは確かである。更に後半の部分で、拙子(廓山)が南都へ家康の命で行くといっている。廓山の南都遊学は『本光国師日記』所収の慶長十八年十月十日付の家康書状によると、廓山は家康の命令で南都の一乗院尊勢の許に唯識の勉強に派遣さ

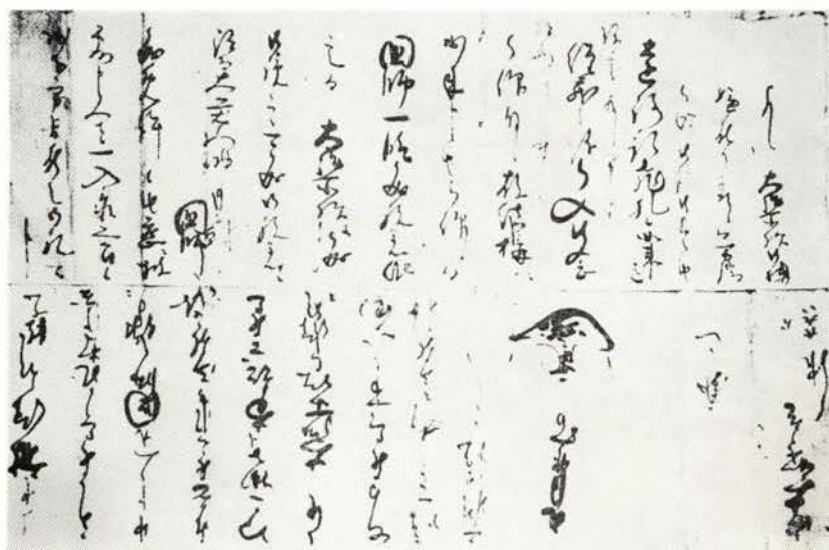
れており、この書状は慶長十八年九月二十五日のものとなる。とすれば増上寺経蔵の完成はこれをあまりさかのぼるものではないであろう。おそらく現在経蔵に収められている三大蔵経の中で最後に収められたのが、近江菅山寺の宋版大蔵であり、これが慶長十八年の七月頃に収められている。おそらくこれは完成間近に収められたものであり、経蔵完成は八月後半か、九月上旬であらう。そして家康は経蔵完成とともにこれらの三大蔵経を増上寺に収めたものと思われる。

以上の理由により、私は慶長十年に増上寺経蔵が完成し、三大蔵経が収められたとする『縁山志』以下の諸本の説には賛成できない。更に現在の経蔵は天和元年(一六八一)に改造され寛政十二年(一八〇〇)に現在の地に移されているが、江戸時代にはこの輪蔵が人々の参詣の対象として大変な賑わいを見せていたのである。

近時、増上寺境内の復興に先がけ、経蔵は文化財の手によって修復され、往時の銅甍の白壁が再現されている。



増上寺 經 藏



廊 山 書 狀

お年賀の施本にご利用を

昭和50年度『浄土宝曆』

B6判 40ページ 一部単価 35円
(200部以上 33円 送料実費)



好評『法然上人と浄土宗』

B6判 96頁 定価180円 (〒70円)
(200部以上 単価160円 送料実費)

現代に生きる法然上人のみ教えを、平易に解説。合せて念仏信者としてあるべき道を示したトラクト。施本等に広くご利用下さい。



〒102 東京都千代田区飯田橋1-11-6

発行所 法然上人鑽仰会

電話(03)262-5944番

「浄土」購読規定

一部 定価 百三十円
(送料十二円)

会費一カ年金一、五〇〇円
(送料不要)

浄土 十一月号

昭和十年五月二日
第三種郵便物認可

昭和四十九年十月二十五日 印刷
昭和四十九年十一月一日 発行

定価 百三十円

編集人 宮林昭彦
発行人 佐藤密雄
印刷人 関二三男
印刷所 三幸社印刷所

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番
〒一〇二 振替東京八二一八七番